

子どもたちみんなに聞いたお母さんの匂い?

子どもたちに聞きました。「お母さんの匂いって、どんな匂い?」。すると…

- 娘…なんといっても一番落ち着く匂い。次男…お化粧品も、香水もしていないときのお母さんのにおいってあるよ。家に帰ってくるとね、お母さんが家にいるんだなあって、そんな匂いがするよ!
- 三男…お母さんはお父さんとおもやい(共同ですること)で服を着る。やる?お母さんせんけど、お父さん香水つけたりさすたい。だけん、お父さんとお母さんの服ば おもやいしてきから匂いが一緒に感じるとかなあと思ったりしてさ。
- 四男…いい匂いよ。せんたくものにおい。あ、お母さんの匂いって思ったら、そうね、安心する匂いって感じ。ほかの人に負けん匂いね、お母さんだけの特別な匂い。
- 五男…サボンの匂い。好きな匂いよ。歌にあるでしょ。卵焼きのにおいよ。いい匂いよ。
- 六男…私のおっぱいの匂いを恋しがっている様子。

「お母さんの匂い」は、母力注入の宿題でした。自分の母を思い出したり、子どもたちに私の匂いを聞いたりしているうちに、少し減りかけていた「母さん燃料」が満タンになりました。子どもたちの素直な言葉を聞きながら、そんな素敵な匂いの母であれたらなって思いました。お母さんの匂いを感じた瞬間、心の奥でスパークすることを実感できました。

(田川亜寿香)



「母の街の匂い」は、子どもならではの感性が、キラキラ光る言葉。香水や化粧品などに「母」を感じる人も多かった。なぜかそこは、子どもには踏み込めない領域で、その匂いが好きだということを、母へも秘めていたあの頃。心の中にある母の匂いは、いつも鮮明に蘇る。

5 人兄弟の長男に嫁に来て姑の下で辛い思いをしてきたことは、子どもながらに感じていました。もともと神経の細やかな母は、体調を崩すことも多かった。何度か疲労で倒れ、入院したこともあって、私は一日中泣いていました。小さい頃の母を思い出すと、同時に切ない気持ちも蘇ってきます。常に母を求めていたけれど、求めすぎて母に負担をかけやいなという思いも抱きながら大きくなりました。あのぬくもりと匂いを思い出すと、何ともいえない思いが、じわ〜と心に広がってくるのです。

(藤巻晴美)

唯一、思い出すが母が吸うタバコの匂い。昼間の仕事を終えて帰宅。夕飯の支度をし、9時から別の夜の仕事へ向かう母。タバコが唯一ホッと一息つける時間だったのだろう。疲れきって、机の上で居眠りを始める母の右手には、まだ火のついていないタバコから煙が漂っていた。こっくりこっくりする母の手からタバコを取り上げ、消していた私。母の手はいつもタバコ臭く、部屋もタバコの匂いで充満。あんなに嫌だったタバコの匂い。でも今は、不思議と母が吸っていたタバコの匂いが懐かしいのです。

(石田尚美)

●「がんばるお母さんの匂い」という言葉が印象的だ。家族や子どものために、ついがんばり過ぎてしまうのが、母の常。がんばる母の姿に寂しさを味わう人もいれば、その姿に生き方を学ぶ人もいる。食べていくことが大変だった時代。外でも家庭でも、母は休みなく働いていた。何をしても食べていける豊かなこの時代、働く意味を子どもたちにはどう伝えよう。時代の変化とともに価値観は変わっても、大切にしなければならぬこともある。そのバランスこそ、今の子育てに必要なものかもしれない。

小学3年生の夏、マンションに引っ越して、初めて自分の部屋を持った。時々、夜怖くなって両親の部屋へ行く。母が隣に入れてくれた。ぬくぬくのお布団にもぐり込んだ。とても幸せな瞬間。母が脇をあげて私の頭を包んでくれたときの何ともいえない

娘の洋服の多くは、人から中、誰からももらったかわかる洋服があります。ほのかに香るお線香の匂い。紛れもなく母の部屋から届けられたものです。服を購入してから数日経ってわが家に来る洋服。母の部屋には毎日お線香がたかかっているからでしょう。なぜかホッと「お線香の香り」なのでした。

(鈴木雄子)

特集

お母さん

記憶の中にある母の匂いは、決して思い出したくない匂いもあった。あるお母さんへの思い(愛情)れもなく、幸せな匂いへと変化さんの匂い」が、どれほど深い



やさしいお母さんの匂い

幼い頃、ぜんそくになりかけたことがあった。咳が辛くてしんどくて、夜も眠れなかった。その頃の思い出は、父の車で毎日お医者さんへ行き、帰りに大好きなイカ焼きを食べたこと。母と薬局へ行き、喉が楽になるように蒸気が出る吸入してもらったこと。熱が出てしんどいときは、母が一緒のお布団でくついて寝てくれた。タマネギやキュウリ…晩ごはんの匂いのする手が私の顔のところにくるのが嫌で、母の手をそ〜とどけた。でもまた戻って行く。学校にしばらく行けなくて、2階の窓から同級生が乗った遠足バスを見て悲しかったときも、母と一緒に布団に入るとちよつとはラクになったの思い出す。(宇賀佐智子)



覚えていてほしいのは、耳かき

耳かきです。高校生のときまで、耳かきをしてきてくれた母。反抗期の渦中にいたときも、耳かきだけはしてくれました。社会人になっても、してもらったことがあります。母の膝の上に頭を乗せ、甘えたことがあります。(川口由起)

娘の洋服の多くは、人から

中、誰からももらったかわかる洋服があります。ほのかに香るお線香の匂い。紛れもなく母の部屋から届けられたものです。服を購入してから数日経ってわが家に来る洋服。母の部屋には毎日お線香がたかかっているからでしょう。なぜかホッと「お線香の香り」なのでした。

(鈴木雄子)

母の街の匂いは、母が愛用

所狭しと化粧品が並べられた母の鏡台。子ども心には特別な場所と感ぜながら、たまにそこへ行っては「いい匂い」と憶れていました。背が高いビル、背の低いビル、太ったのビル、ちっちゃなビル、きれいな色のビル、いろんな化粧品たちがたくさん並び立ち、いろんな匂いが香っている母の街。今でも実家に泊まり、化粧水を借りるとき、鏡台の前には「母の匂いの街」が、それは、懐かしかったり、ホッとしたり…。すぐに私を幼かったあの頃に引き戻してくれるのです。(石坂香)

娘にとつて私の匂いは、ブルブルローズという香水の

匂いだそうす。落ち着く匂いなんです。ほんのり香らせているから、それがお母さんの匂いになったのです。私の母は、ニベアの匂いでしようか。手荒れのひどい人でしたから、ニベアは欠かせないものだったと思います。(笹本翠)

病気の辛さや悲しみ、寂しさや切なさ…子ども頃の心の隙間を埋めてくれたのは

いつだってお母さんと一緒に布団だった。お母さんが、生活の中で教えてくれたのは、やさしい母の心だった。「母の街の匂い」は、子どもならではの感性が、キラキラ光る言葉。香水や化粧品などに「母」を感じる人も多かった。なぜかそこは、子どもには踏み込めない領域で、その匂いが好きだということを、母へも秘めていたあの頃。心の中にある母の匂いは、いつも鮮明に蘇る。

お母さんの存在の大きさ

ある日、「お母さんの匂い」というテーマ(宿題)を与えられた「お母さん大学」の学生たち。お母さんたちは皆、迷子になりながらも、「お母さんの匂い」を丁寧に思い出す作業を試みた。最初は、宿題だから、レポートを書かなければ、という気持ちだったけれど、「お母さんの匂い」を考えていくうちに、何十年前のことが一気に蘇る瞬間があつて驚いたという。まさに、その瞬間が「母を感じる瞬間」だ。

お母さんの匂い…。それは、決して、母の体から放つ「匂い」にとどまらない。ひとりの母が母親が生きてきた人生であり、母の存在そのもの。ひとつの匂いから母と自分の存在が重なるとき、そこには、目には見えない大切な親子の絆ともいえる、「母」と「私」にしかない空間である。お母さんの匂いを感じる時、目の前に、愛する母親が、「今」に蘇るのだ。まさに、そのときこそ、母と自分が次元・空間を超えて「響感」できるといふ素晴らしい瞬間なのだ。

これまで、20年も新聞をつくり続けているが、編集しながら、「お母さんの匂い」を感じたのは初めてだった。描くシーンは、それぞれに違うけれど、そこにはやさしさを溢れる「お母さんの匂い」が充満していた。「お母さんの匂い」は、カタチにはないもの。だが、私たちの心に蘇る「お母さんの匂い」は、ずっとこれからも、私たちの心の中で生きていく。母そのものなのだから、このことを教えられた。「お母さんの匂い」がしゃぼん玉のように空高く広がる時、子育てに夢が持てる社会への扉が開くだろう。

(編集部)

